



TITLE:

類人猿の発達とその生物学的基礎 (VI 共同利用研究 2.研究成果)

AUTHOR(S):

CITATION:

類人猿の発達とその生物学的基礎(VI 共同利用研究 2.研究成果). 霊長類
研究所年報 1999, 29: 138-138

ISSUE DATE:

1999-11-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/165182>

RIGHT:

・黒部川流域に生息するニホンザル地域個体群の動態（ダム建設に伴う遊動域の変動）
（加藤 満、愛知県立旭野高校）

類人猿の発達とその生物学的基礎

（実施年度：平成7～9年度）

（推進者：松沢哲郎・小嶋祥三・友永雅己・
濱田 稔・松林清明・藤田和生¹

（¹平成7年度のみ）

霊長類の中でもとりわけヒトに近縁な類人猿を主な対象として、発達とその生物学的な基礎にかんする研究を企画した。類人猿だけでなく、ヒトや類人猿以外の霊長類も比較研究の対象とした。姿勢・運動、学習行動、コミュニケーション、社会的な場面での行動の研究と、発達の基盤となる形態学的・生理学的研究との関連を追及した。

研究所では、平成5年の大部門改組によって行動神経研究部門に思考言語分野が誕生し、類人猿の研究を推進する核となる組織ができた。さらに平成6年度末3月に類人猿行動実験研究棟が完成した。地上5階・地下1階の約2500平方メートルの施設で、地階のすべてと1階の大部分が類人猿研究用のスペースになっており、併設した8つの居室と、屋外運動場3つがある。1群10個体のチンパンジーを新しい研究施設に移動させ、平成7年度初頭より新研究施設での観察・実験研究が始まった。

こうした所内における類人猿研究の基盤整備に連動して、広く所外に共同研究を呼びかけた。幸い、所外から興味深い共同研究の提案があった。課題研究の3年度にわたって、以下のような、のべ10件が採択・実施された。認知・行動とその発達に関する研究がのべ8件、その形態学的・生理学的基礎に関する研究が2件だった。所内でも、チンパンジーの人工授精の試みが平行しておこなわれ、9年度末に妊娠に到った（ただし平成10年7月に満期で死産だった）。

日本モンキーセンターに出ていたマリが戻ってきて、チンパンジーの総数は11個体になった。所内外で共同して、認知と行動の研究が多様な研究トピックスについて推進されている。また、平成9年度からはニホンザルの人工保育を始め、類人猿との比較研究をおこなった。

（平成7年度）

・大型類人猿およびマカクにおける等価性の成立要因

（堀野美奈子・日本女子大）

・視覚・運動機能および発声の分析からみたヒト乳児における到達行動の発達

（明和政子・京大、田中昌人・竜谷大）

・チンパンジーの粘土造形

（中川織江・日本女子大）

・チンパンジーは奇術をどう見るか

（渡辺茂・慶応大、瀬島順一郎・大阪産大、古屋泉・慶応大）

（平成8年度）

・類人猿幼年期口コモーション発達

（木村 賛・東大）

・チンパンジー乳児における到達行動の発達

（明和政子・京大）

・チンパンジーの粘土遊び

（中川織江・日本女子大）

（平成9年度）

・霊長類における自然法則の認識とその発達

（藤田和生・京大）

・類人猿の二足行動における大殿筋の作用に関する生体機構学的研究

（松村秋芳・防衛医大）

・チンパンジーの物の操作に関する模倣

（明和政子・京大）

霊長類における視知覚および視覚認知の特性とその脳内機構の研究

（実施年度：平成7～9年度）

（推進者：三上章允・松沢哲郎¹・中村克樹¹・

櫻井芳雄¹・藤田和生²・友永雅己²・

澤口俊之²・久保田競²）

（¹平成8、9年度のみ、²平成7年度のみ）

霊長類は視覚動物と言われるように視覚系の発達がよい。霊長類は視覚優位の行動パターンを示すだけでなく、大脳新皮質レベルでも視覚情報処理に関わる領域が広く、アカゲザルでは55～57%に達する。そこで、本計画研究課題は、霊長類における形態視、色彩視、立体視、運動視などの視知覚、および視覚認知の機構を心理物理学的